

座談会 こころというブラック・ボックス

パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳など多くの分野で画期的な業績を残してこられた長尾真先生をお招きし、現在、館長を務めておられる国立国会図書館の役割や翻訳システム、こころの捉え方、アジア的価値観などについて語り合った。

長尾真 (国立国会図書館長、京都大学元総長・名誉教授)
吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
船橋新太郎 (こころの未来研究センター教授)

●国立国会図書館の現状●

吉川 長尾先生は国立国会図書館の館長をなさっていますが、国立国会図書館は、日本で出版されたものは全部集めるといっているのですか。

長尾 そうです。国立国会図書館法に、国内で発刊された出版物はすべて国会図書館に納入することとあって、出版した人が納めるべき義務を負っています。納めなければ罰金を課すこともできます。実際には課したことはありませんが。この法律があるので、うちの職員は出版されたものは100%届いているはずだと思って、何もしていなかったのですが、私が館長に就任して調べてみたら、普通の出版物では全体の9割、官庁出版物では8割くらいしか納められていません。大学の出版物では、私立大学が8割、国立大学が7割程度です。自治体の出す資料にいたっては4割しか来ていないんです。頭を下げて頼みに行っても集める努力をしないかぎり、100%なんて絶対に集められない。

自費出版や社史もなかなか納入されません。社史というのは、その会社のことだけでなく、業界の歴史などいろいろなことがわかるので、一生懸命集めるように、と言っています。国民には出版物を国会図書館に納入する義務があるということをお知らせしていただければいいということで、「納本制度の日」というのを5月25日に決めて、新聞で大々的にキャンペーンをしたりしています。

吉川 私も国立国会図書館法という法律のことはよく知りませんでした。

長尾 みなさんがあまりご存じないだろうと思う国立国会図書館のもう1つの重要な機能は、国会議員に対するサービスです。国会議員がいろいろな委員会で質問をしたり発言したりしますね。そのための基礎資料の多くは国会図書館が作っているのです。例えば、国会議員から、「明日の委員会でこういう質問をしたいので、こういうことを調べてほしい」と言われると、24時間以内にきちんと資料を作って渡さないといけない。そんな質問が年間4万5千件も来るのです。

吉川 え、そんなに。

長尾 特に国会開会中はものすごい数になります。「少子化問題は、ほかの国ではどうなっているか、それに対してその国の政府はどういう政策をとっているかを調べてくれ」といった依頼がざらにある。そういうことを調べて調査結果を出すのは、国会図書館職員のすごい能力です。同じ依頼を各省庁にすると、その省庁の知っていることだけを報告してきて情報が偏る可能性があるのですが、担当省庁に聞くのと同時に、国会図書館に聞いてくる人もいます。

吉川 普通に考えている図書館のイメージとはずいぶん違う機能があるんですね。

長尾 このような仕事をしている部門を調査部門と呼んでいます。調査部門の職員には大学の先生と変わらない能力を持っている人もいますし、たまに大学へ移る人もいます。国会図書館には900人の職員がいますが、調査部門は120人でやっています。アメリカの議会図書館も同じような機能を持っていて、専門調査員が400人くらいいます。国立国会図書館が国会の活動を支えているということは、世間にあまり知られていません。このようなこともPRしようと一生懸命やっています。

●電子化と著作権問題●

船橋 国会図書館の電子化作業は、いつ頃から始まったのですか。

長尾 2002年に関西館ができたときには、ある程度ものをオープンしました。だけど、作業のためのお金がないのと著作権問題で、なかなかデジタル化できないんです。明治・大正期に出版されたもので、いま著作権のない書物は、小説などを含めて15万冊デジタル化しています。それは国立国会図書館のウェブ・サイトから入ったら見ることができます。

これから昭和初期の書物をデジタル化しようとしているの

ですが、著作権が切れているかどうか分からないものが山ほどある。明治・大正期の書物もそうでした。著作権は著者の死後50年間あります。明治期はみんな若くして本を書いているので、30歳のときに書いたとして、その人がもし100歳まで生きたとすると、本が出版されたときから120年間、著作権が残っていることになります。

著作権者が亡くなったら、子供に著作権が移り、子供が亡くなったらまた孫に移る。そうやって50年間、著作権は継承され

ていくのですが、その著作権継承者が日本のどこにいたかがほとんどわからないのです。明治・大正期の15万冊をデジタル化するときに、国の組織が著作権法違反でもしたらどうにもならないので、徹底的に調べたそうです。これを調べるのに2億円もかかったというから、大変です。

船橋 例えば、科学関係の雑誌が電子化されてウェブ上に載っていますが、著作権はどうなっているんですか。

長尾 著作権としては同じです。科学雑誌の場合、先生方は学会に著作権を委譲していることが多いでしょう。だから学会が著作権を持っていることになります。

船橋 学会や出版社が許可すればいいということですか。

長尾 そういうことです。私たちは、エルゼビアとかシュプリンガーとか、いろいろなところの電子ジャーナルを3万4000タイトル持っています。京大の図書館でも2万タイトルくらい持っていると思いますが、そのために高い購読料を払っています。京大もたぶん4億円くらい払っているんじゃないでしょうか。

船橋 全部の出版物を電子化するというのは、そんなに簡単な話ではないわけですね。

長尾 簡単じゃない。本だけですと国立国会図書館にはほしい900万冊ありますが、そのうち電子化しておいた方がいい本は400万冊くらい。それをやるとしたら、いまの技術とかコストでいうと400億円くらいかかります。出版物はこれからもどんどん増えていきますし、それに著作権の問題で、出版社は書籍の電子化に反対しています。

船橋 いろいろな人がブログを作ってインターネット上で公表しているけれど、あれも1つの大事な文化遺産だから、国会図書館がどこかに保存しないといけないんじゃないかと、朝日新聞が社説に書いていましたね。

長尾 そのことは、私が館長になったときから言っているんです。みんなオープンにしているものなんだけれど、それを集めて保存して、人に利用させようとする、著作権法に



国立国会図書館 上は利用者入口付近、下は目録ホール

引っかかってだめだということになる。いちいち許諾を得ないと集められないんです。

国とか国立大学とか、2,300か所ぐらいのウェブ・サイトはいま許可を得て集めています。でもウェブ・サイトは何万、何十万とあるから、いまのところすべては集められない。少なくとも国に関係する機関のものについては許諾を得ずに集められるように、国立国会図書館法を改正しようと思っ

て努力しています。

吉川 そうすると、保存する情報は無限大に増えていきますね。

長尾 そうですね。国会図書館の場合は、納入されたものは国有財産になって、捨てられないんです。だから、ウェブ・サイトも値打のあるものはどれかを判断して集めなければいけません。これがまたむずかしい。

船橋 研究でも同じです。とりあえずデータは全部集めておいて、どう使うかは後で考えることにします。

長尾 すぐに利用することを考えると著作権問題がからんでややこしい。それで、例えば30年は絶対に使わないという条件をつけるなら、許可を得ずに集められる可能性はあります。出版社も、一定期間は絶対に公開しないという前提で、集めるだけなら許可してもいいと歩み寄ってきてくれる可能性があります。



長尾真 (ながお・まこと)

1936年生まれ。国立国会図書館長。元京都大学総長、京都大学名誉教授。元独立行政法人情報通信研究機構理事長等さまざまな要職を歴任。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館などの分野において優れた研究業績を挙げ、国際的にも極めて高い評価を得ている。1997年紫綬褒章授章、1999年英国ノッティンガム大学名誉博士授与、2004年フランスのレジオン・ドヌール勲章授章、2005年日本国際賞受賞、2008年文化功労者。

●翻訳システムの開発●

船橋 長尾先生が図書館の方に進まれた理由は何でしょうか。

長尾 私はもともと人間に興味があったんです。大学受験のときに文学部へ行こうか理学部へ行こうか迷って、よほど文学部の哲学科へ行こうかと思ったんだけど、周囲の人が、それでは飯が食えないからやめておけという。ちょうど私の受験のときに工学部に電子工学科ができて、電

子工学なら理学部の匂いがするし、工学部だったら飯の食いはぐれもないだろうということで、電子工学科へ行っただけです。

大学を卒業して助手になったときに電子計算機が登場しました。アメリカでは1955年ごろから「人工知能」という言葉が使われていました。私は人間に興味があったので、人間的なことをコンピュータにやらせるのは面白いんじゃないかと思ったんです。

最初にやったのは、言語学習みたいなことでした。“I am a boy.”とか、“I am a girl.”とか、いろんな文を日本語と英語をペアにして大量に入力して照合すると、文法構造とか、日本語と英語の対訳とかが抽出されて、学習機能を持った翻訳システムが作れるのではないかと考えました。でも、やりだしてみると、当時はコンピュータの記憶容量が小さいし、データがほとんどなくて全然できなかった。これではいけないと思って、文字読み取りの研究を始めました。

それがうまくいって生まれたのが、1967年に東芝が開発した郵便番号の読み取り装置です。研究した結果が実世界に利用されることの価値をそのとき知りました。

吉川 それから画像認識の方に進まれたわけですね。

長尾 そう。画像処理も日本では誰もやっていなくて、画像をコンピュータに入れるのはものすごくむずかしかった。KDDの研究所に頼んでデジタル・データを作ってもらって、顔の認識研究を行いました。

吉川 1970年の大阪万博のときですね。

長尾 大阪万博の住友童話館で、カメラの前に座ると、その人の顔がデジタル処理されて顔の輪郭画像が出てくる仕掛けを作りました。有名人の顔も入れておいて、その人に似た顔の人と照合して、例えば「あなたの顔はケネディーに似ています」とか言って渡すという面白いことをやっていました。そのときに、何千人という顔のデータをコンピュータで処理したので、そのうち千人ぐらいのデータを分析するというのを金出武雄君といっしょにやったんです。世界で初めてでした。彼はその後、画像処理では世界の第一人者になりました。

吉川 機械翻訳はいつごろから始められたのですか。

長尾 72～73年ごろから機械翻訳の研究を始めて、78年ごろに科学技術関係の英語論文のタイトルを日本語に翻訳するシステムを作りました。ありがたいことに、筑波の電子技術総合研究所がそのシステムを使ってくれました。成果はまずまずでした。

ところが、誰かがいたずらで“He is a boy.”と入れたら、「ヘリウムは少年です」という訳が出てきた。「He」は彼という意味だけでなく、ヘリウムの元素記号でもあるから。それが「面白い、さすが科学論文を扱うだけのことはある」といって新聞に載ったんです。半分皮肉だろうけど、その



船橋新太郎 (ふなはし・しんたろう)



吉川左紀子 (よしかわ・さきこ)

記事を科学技術庁の人が見て、私に翻訳機の研究開発を頼んできたんです。

70年代後半から80年代は、日本は科学技術や産業が飛躍的に進歩した時代でした。アメリカの技術は日本にどんどん入ってくるが、言葉の障壁があって、アメリカには日本でどんな技術が開発されているのかわからないから、英語に翻訳して出してくれと圧力をかけてきた。そこで、科学技術庁が予算をとって、4年間に当時の金で6億5000万円ぐらい使って翻訳機の研究開発をしたんです。

船橋 それはすごいですね。かなりの記憶容量のコンピュータがあったんですか。私が77～78年に霊長研で実験を始めたころは、32Kのメモリーで、180Kのフロッピーディスクを使って実験をやっていました。いまから思うと信じられないような小さなメモリーです。

長尾 それに毛が生えたようなものだったのではないのでしょうか。4年間でまあまあうまくいきました。そのシステムを改良して、日本科学技術情報センター、いまの科学技術振興機構から翻訳ソフトを売り出したらけっこう売れたらしくて、元を取ったと言っていました。

吉川 日英ができると、例えば日仏とか日韓とか、ほかの言語にも基本的な部分は広げていけるんですか。

長尾 いまだだったらいけるでしょうね。しかし当時は強引に作ったから、1つのソフトウェアでいくつの言語に使えるような融通性のあるものにはなっていませんでした。

●自然科学としての言語学●

吉川 国際電気通信基礎技術研究所で、電話での音声翻訳して伝える装置を一時期開発しようとされていたようですね。

長尾 いまでもやっています。その装置を去年の北京オリンピックで使ったようです。日本語と中国語の翻訳で、例え

ば日本語で「今日の水泳競技は、どこへ行ったらいいですか」と聞くと、それが中国語に訳されて、中国の人が中国語で「何番のバスに乗って、どこへ行きなさい」と答えると、それがまた日本語に訳されるというわけです。

もう1つは、音声ではなくテキストを翻訳するものです。中国の北京オリンピックのオフィシャルサイトの情報を、中国語から日本語に訳すという翻訳システムを作っています。それもうまく使えたらいいから、翻訳システムはだいぶよくなったようです。

吉川 始められてから25年ぐらいになりますものね。

長尾 物理学のように、ある種の発見によっていきなり進歩するんじゃないで、言語はじわじわしか進まないんです。心理学でもそうでしょう。

吉川 そうですね。先生は当時から、言語学の知識は機械翻訳にはあまり使えないと言われていました。同じ言語を扱っても、言語学で扱う言語と、機械翻訳で使われる言語は何か違いましたね。

昔から長尾先生は、とにかくデータをたくさん集めて、そこから何かを抽出し、それを機械翻訳に利用するという感じでしたが、言語学はそういう進め方はしませんね。いくつかの例を直感的に集めてきて、その中にあるルールについて議論するというような感じでしょうか。私が大学院生だったころ、長尾先生が主催されていた対話研究会にでていたのですが、言語学者と情報学者が、「それでいいのか」という議論をよくやっていました。

長尾 そうそう。チョムスキーの時代には言語データはあまり集まっていなかったから、言語データに関することはまったく信用されていなかった。だから、結局、チョムスキーなどの言語学者たちは、頭の中で、言語というのはこういう体系のものであると考えて、言語学を構築していたのです。

けれどもいまは、さまざまな人が発話する言葉、何億何十億という文をきっちり集めることができる。事実、イギリス



世界初の手書き文字を認識する郵便番号自動読み取り区分機 (東芝科学館提供)



1970年の大阪万博のとき、住友童話館で「コンピューターの天眼鏡」が展示された。工業用テレビカメラで顔を撮影し、それをコンピュータに入力すると、輪郭だけが強調された画像ができる。鼻、口、頬などの位置を測定し、そのデータから性格を判断、その性格の代表的人物のイラストが示されるというものだった。世界の先端をいく技術的試みが話題となり、常に長蛇の列ができた。（『住友童話館の記録』より）

では、レストランで話す言葉、家で話す言葉、夫婦で話す言葉など、あらゆる言語表現をしっかりと集めているんです。そうすると、言語というものを頭の中で観念的に考えるのではなく、何十億という言語表現を客観的な対象として冷静に分析することで、言語学を作ることができる。つまり、言語学が自然科学の世界に入ってきたと言ってもいいのではないかと私は言っているのです。

自然科学は、主観とか主体で何かするのではなく、あくまで自分の外にあるものを冷静に分析する。心理学も、自分の心理ではなく、人の心理を観察してメスを入れるということをやるとしたら、言語学も同じで、これからは客観的な対象が厳然と外にあって、それを分析することになるのではないのでしょうか。つまり自然科学の領域に入ってくる。

●ころというブラック・ボックス●

吉川 心理学はころのはたらきを目に見えるものにして考えようとしてきました。

長尾 そうでしょうね。ころや脳の働きなどは一種のブラック・ボックスだと思うんです。ブラック・ボックスの中で何が行われているかを考えようとすると、そこから出てくる現象を徹底的に調べることによって推察するしか手がない。

例えば、ある人のころは温かいとか冷たいと言うとき、何をもってそう言えるかという、その人のいろいろなシチュエーションにおける発話や身振りといったものすべてを徹底

的に集めて分析すれば可能なのではないかと。吉川さんの発話データとかふるまいを集めて分析すると、吉川さんのころはこうではないかと言える、そんな手法があるのではないかと思いますか、どうでしょうか。

吉川 自分で意識できる部分は、自分のころのほんの一部ですから、ころの全体を知ろうと思ったら、外に出たものを手がかりにして考えざるを得ないですね。

長尾 だから、ころには実体があるかどうかを議論しても、私は無駄だと思うんです。ころというのは、非常に抽象的に捉えられた、ダイナミックなある種の現象でしょう。ころというモノそのものがあるわけではないからね。

吉川 実体はないけれども、科学的な研究の対象にはなりえる。例えば、Aさんのころは冷たいか温かいかといった判断でも、もともと一貫性がないのなら、Bさんが思うのとCさんが思うのでは意見が一致しないはずなのに、一致することが多いんです。ということは、複数の人が認める「ころの温かさ、冷たさ」の判断基準には共通のものがある。

長尾 その人の発話や行動を山ほど集めて、ある種の分析をやったら、みんなが共通に認める、冷たいか温かいといわれるような要素が抽出されてくるんじゃないか。それは、言語的な分析方法としても面白いと思う。

吉川 もう1つ、私が面白いと思うのは、ある人の言葉や行動を全部分析して、まわりが客観的に「冷たい」と認定したとしても、本人はきっと納得しないだろうな、ということなんです。逆にいえば、自分自身のころをいくら内省して、こうだと定義づけて考えても、実はそこに真実があるわけではないのかもしれない。そんなふうにと考えると、自分自身のころについてあれこれ思い悩んでも仕方ないのかな、と思ったことがあります。本人自身がいくら自分を定義しようとしても、それは客観的事実を分析した結果ではないから「正しい」わけではない。自然科学の世界では、人のころはその人以外の人たちによって定義されるし、本人自身というのではない。

長尾 自分を見つめているもう一人の自分がいて、できるだけ客観的に自分を眺めようとするれば、自分がどういうキャラクターの人間かは、ある程度わかるでしょう。だけど、それが第三者が見ているものとどこまで一致して、どこまでずれているかという問題は、どうしても残るんです。もう一人の自分といっても第三者ではないから。そのころはどうしようもないから、割り切るか……。

吉川 何かに任せるとか。

船橋 でも、一致するところもあるわけですよ。一致するところが大事です。

長尾 一致するところはあります。それが多ければ多いほど、その人は自分の我から離れているということになる。

吉川 ずいぶん昔、私が大学1年生だったときに、心理学概論の授業で性格検査をしました。「あなたは人の前

に出て話すのは苦手である」といった質問に、「はい」とか「いいえ」とかで答えていくタイプの検査です。私は、自分で「人見知りするほうだと思う」と思って、「はい」に○をすると、まわりの人は、「吉川さんは、絶対違う」と言うのです。考えてみたら、私自身が自分のことを、例えば内向的だと思っていたとしても、まわりの100人が外向的だと思っているとしたら、どちらが正しいというのは言えないんですね。

長尾 そうそう。わからないね。

吉川 そこに、ころの不思議さというか、本人自身が思っている自分の姿というのは、実は間違いなのかもしれないということに、ずっと妙なひっかかりを感じていました。

長尾 本人が自分を見てどう捉えるかという世界は、例えば哲学とか、ある種の学問世界として存在しているいいと思うんです。だけど、通常の心理学とか認知科学とか多くの学問の場合は、自己というものを自分から離れた客観的世界の中で分析していく方がやりやすいし、学問としてちゃんと体系づけられるでしょう。

●ころを捉えるむずかしさ●

吉川 先ほど長尾先生は、工学的なアプローチで機械翻訳のシステムを作ったときに、学問が大学を出て社会一般で使われるようになったと言われましたが、心理学の場合、みんなが知りたいことの上位にくるのはおそらく自分のころです。でも、心理学の科学的アプローチで客観的にその人の行動を分析して、「あなたのころはこうです」と言ったとしても、それはまわりにとっては役に立つ情報かもしれないけれど、本人にとってはあまり役に立たないわけです。必ずそこにはズレがありますから納得しにくい。心についての科学的知識を利用して人は自分の行動を変えうるか、ということについても、簡単にはいきません。Aさんが教えてくれた知識やアドバイスなら受け入れられるけれど、Bさんが言ったのだったら同じ内容でも聞きたくないということもあります。

長尾 それは船橋先生の領域ではないでしょうか。脳の中である種のモデルを想定し、そのモデルがいかに活性化されて働くかを考えるとき、その下の情動的な部分が、脳の思考のメカニズムをコントロールしている。それはある意味で化学物質的なものが影響しているような感じがするんです。そのモデル全体をコントロールしているある種の物質があって、そういうものも含めた全体をモデル化しないといけないんじゃないか。

船橋 ある人が話しているすべての発話を記録して分析しようということですが、似たようなことをやろうとしている研究者はけっこういます。例えば、脳波をずっと取り続けてどんなものが出てくるかを調べるとか、その人が見ている風景

を一生撮り続けるとか、脳の全部の神経の配列をしらみつぶしに調べるとか。それで何が出てくるかはよくわからないんですが。

長尾 そのときのパラメーターとして、例えば情動的な部分がプラスに働いているかマイナスに働いているかを現象として記録しておく方がいいのではないかと。そうでないと同じ形が出てきても、解釈の仕方が変わる可能性がある。脳の奥の奥にある情動的な部分がいくぶんか関与しているのではないかと思うのですが、どうですか。

船橋 たぶん、そうだと思います。以前は、認知的な働きが大事だと言われていましたが、ころの問題を考えようとすると、感情のことを絶対に考えないといけません。そこは一番大事なことだと思います。ところが、感情は内観が中心になるので、科学的に取り扱おうとするものすごくむずかしいですね。

吉川 主観を超えるキーワードになるのが、共感だと思います。人は、他の人の感情にいつのまにか動かされるときがありますね。単に客観的に、「この人は笑っているな」とか「泣いているな」ではなく、泣いている人を見たときに、自分もいっしょに悲しい気持ちになるというメカニズムはどうなっているのか。そこが一番知りたいところです。

長尾 そこにはその人の育ってきた道筋がすごく関係していて、例えば、ある言葉とか、目で見たある状況や情景が、頭の中で論理的に処理されているだけの人と、論理的に処理される以前に何か脳の深い部分に伝達されて、そこでの情動的な働きに支配されるような人がいる。人それぞれ特徴を持っていて、いろいろなことが作用しているのではないかと思います。生まれてからの経験によって脳の構造がどこか違っているのかもしれない。

●宗教におけるころの問題●

吉川 先生は、非常に落ち着く所とか、自分には合わないなど感じる場所などがありますか。

長尾 最近気がついたけれど、東京へ行っていると、やはり本能的に身構えているというか、神経が立っているように感じます。京都へ帰ってくるとそのへんが全然違う。不思議ですね。

吉川 大学院生のころに、対話研究会の研修旅行で、長尾先生とご一緒したとき、どこかの神社で「ちょっとお参りしてくるから」と言われて、柏手を打ってお参りされました。その姿を後ろからみんなで見ていたことがあるんです。そのときに、先生がお参りする姿勢やお辞儀の角度がすごく決まっていたので、「さすが長尾先生だ」という話をしていました。私は、神社とかお寺にはあまり縁のない育ち方をしてきたので、京都に住んでいてもそうしたことには最近まであまり関心が高かったのですが。



神社や神聖な場所に行くと、ころが洗われ、清浄無垢になる。(奈良・鴨波神社)

長尾 神社とか神聖な場所へ行くと、やはりころが洗われます。邪念を払うというか、清浄無垢になるというか、そういう瞬間を得られる気がするんですね。神社へお参りをすると、みんな「幸福」とか「家内安全」を願うじゃないですか。私はお願い事のためにお参りをするということはまったくくない。お参りすると自然に気持ちがしゃっきりとする、精神統一ができるからお参りをするのです。神さんを信じているとか、そういう話とはちょっと違う。

吉川 長尾先生は以前、神道にはあまり哲学がないけれど、仏教は深いといった話もしてくださいました。

長尾 理屈の上では、仏教はものすごく深いでしょう。だけど、宗教の根元というのは似ているんじゃないですかね。

吉川 私は認知心理学が専門で、認知心理学は実証科学という視点でころを考えますから、ころの未来研究センターに移って初めて、宗教学とか民俗学といった人文科学のころの研究と自分の研究との接点について考えるようになりました。

長尾 宗教におけるころの問題というのは、大いに研究する必要があると思います。

吉川 宗教学を専門にされている先生がたといっしょに神社やお寺を訪ねて、地元の人が日常的にお参りしたり願かけしたりする姿を見て、人のころについて気づいたり考えることがたくさんありました。実を言うと、お参りするか祈るといふことは、最近まで自分にはあまり縁のない世界だと思っていました。

長尾 そうですか。キリスト教とか一神教というのは、大前提として神があって、神の前にひれ伏すというか、神のもとに自分の精神がコントロールされているという構造だと思

うんです。だけど、仏教や神道というのは、絶対神というのはなくて、自分がいかに神的なものに近づくかということを追う宗教ではないでしょうか。そういう意味で、東洋の宗教はいいんじゃないかという気がします。

船橋 確かに、修業して神や仏に近づくという精神の姿ですね。

長尾 そう。自分が善的な人間、トータルな意味において良い人間になるというか。

吉川 私がとても驚いたのは、京都の千本丸んま堂に入ったときに、ものすごく

怖い閻魔様の像があるんですが、そこにおられた尼さんが、閻魔様はお地藏様の化身であって、怖い顔で人を脅しているのではなく、いっしょに苦しんでいる顔なんだ、ということをお話されたんですね。何も知らずに見ると恐ろしい顔が、そういうお話を聞いてから見ると、何か慈悲深い顔にも見えるという不思議な経験でした。

心理学でよくつかう評定尺度が典型的なのですが、「親切な—親切でない」とか「温かい—冷たい」のように、ふつう、正と負、プラスとマイナスはひとつのものさしの両端にあって、正反対の価値を表します。ところが、仏教の世界では、見る人が震え上がるような怖い顔と、やさしい慈悲の顔とを表裏一体のものとして捉えているんだな、と驚きました。西洋の、神と悪魔の関係とは全然違う見方ですね。閻魔様とお地藏様は同じものの違う側面である、と。だから、そのどちらを見るかというのは、その人のころの状態によって変わるし、そのときのまわりの状況によっても変わるかもしれない。

長尾 そういう人たちは、閻魔様ともころを通じ合う形で交流できると思っているんじゃないですかね。自分のころを気楽に通い合わせることができるような世界を楽しみ、それで安心を得ている。キリスト教だったら、絶対的にひれ伏すという恰好になるのではないのでしょうか。

●変わる力をもろう●

吉川 NHKの「につぼん 心の仏像」という番組で見たのですが、ご夫婦で遠くのお寺をたずねて行き、そのお寺にある仏像に自分たちの気持ちを聞いてもらう、という話がありました。そのご夫婦は「前に座ってお顔を見ると、こ

ろが洗われる」と言われるんですね。その仏像を見るとご夫婦の気持ちに私たちも共感する。同時に、この現象をどう理解したらいいのかな、と。

そこには、動かないし語ることもない仏像があって、その前に座ることで気持ちが癒されたり元気をもらったりして、また帰っていく。心理学の目で見ると、カウンセリングと似たようなところがある気がするんです。仏像を前にして、人のころに何が起ころんだろうということに、今とても関心があります。

長尾 仏像を前にすると、気持ちが整理されて、邪念が吹き飛んで、本質的な自分の生きるべき姿がはっきり自覚されるようなある種の働きが起ころってくるのではないですか。

吉川 そうなんです。仏像がその媒体になるんですよ。人は何らかの強制によっても変わることがあるでしょうけれど、自分自身の中から変わっていく、そのきっかけになる仕組みが社会の中にいろいろある。仏像や神社参りもそうですが、プラスの方向に変わるきっかけとなる仕組みが、社会や伝統文化の中にあって、それがどのように人に影響を与えるのかを学問的にみてゆけないか、と。

長尾 そこはむずかしいですね。例えば、物理学のノーベル賞をとる人なんかでもそうでしょう。難問があって、いくら考えてもどうしても解けなかったのが、ある日ふとしたことで「これだ」というのが出てきて、パッと解けるといふことがある。それと似ているんじゃないですか。

吉川 そうですね。自分だけで悶々としていても変わらなくて、外にある何かによって劇的に変わることがある。別にだれかが答えをくれたり、直接助けてくれるわけではないのに、変わる力がもらえるというところが、人のころの不思議なところだなあと感じます。客観的にみていくのは非常にむずかしいのですが、センターのプロジェクトの中で、妙法院をお願いをして、三十三間堂の千手観音像の写真を撮らせていただいたので、まず認知科学的なアプローチで、仏像の画像を見たときの目の動きを分析するとか、基礎的なところからやってみようかなと思っています。

長尾 それだったら、大橋力先生流に、脳の中の活性領域を同時に調べるとか、そういう実験ができれば、プロセスがよりはっきりとわかってくるんじゃないでしょうか。

●アジアの伝統文化の知恵●

吉川 そうですね。昨年夏、センターの仲間で大橋先生のバリのご自宅を訪問し、ケチャヤガムランのすばらしい演奏を見せていただいて、みんなとても感銘を受けて帰ってきました。バリへ行くと、欧米の世界観とは全然違う原理があることを実感しました。

長尾 確かに心理学の場合、バリのケチャのような世界をもっと分析すると、いろんなことがわかってくるんじゃないで

千本丸んま堂の閻魔王像(千本丸んま堂提供)

すかね。私も「バリにまい」と言われているのですが、まだ行ったことがなくて……。

吉川 バリでは社会の伝統的な仕組みが、個人より集団ベースで作られています。それから、農耕社会だということもあると思うのですが、山や谷、森などいたるところにいろんな神様がいて、その神様に守られているというような発想がずっとあるんです。水が潤れることは、神様と自分たちをつなぐ大事なものが失われてしまうことだから、水は常に循環していないといけな、とか。1000年以上前に作られたという水田の水利システムがすごく発達しています。その根っこにあるのは、科学的にみて良いシステムを作ろうといったモチベーションではなくて、神様と自分たちのつながりを切ってはいけないということなんです。

たとえば、山の木を切って山の神様を怒らせると水が潤れる、水が潤れて自分たちは神様から見捨てられてしまう、といった物語で語られるんですが、それで精緻な水利システムを複数の村落で作上げて、千年も続いている。京都も都として千年続いているわけですけども。私たちがこ



昔からある水利施設を利用したバリの水田

れから真剣に学ぶべきものがあるとしたら、欧米のモデルではなくて、バリのようなアジアの伝統的な文化の持っている知恵のすごさではないでしょうか。

長尾 それは芸術なんですよ。西洋の科学技術は、芸術の手前の段階までしか行かない。誰がやってもできる範囲をやっているというか、誰でもできるように地ならしをしているんです。芸術は科学技術の世界から一歩ジャンプした世界の話だと思うんです。

バリでは、千年の歴史をもって、芸術的というか、科学技術では追いつかない人間の叡智の塊みたいな世界を作り上げた。

吉川 すばらしい彫刻でも、みんな職人の人たちが作っている。一度見たら目が離せないようなすばらしい彫刻がたくさんあって、でも芸術家という発想ではないから、名前を彫ったりしないんです。こういう社会があるのかと、本当に驚きました。

長尾 「アート」というのは、もともと工芸技術が言葉の起源なんです。バリはそういうことを徹底的にやっている世界なのでしょう。日本の室町時代から江戸時代にかけてのいろんな芸術でも、そういうものは山ほどあります。後から作者を一生懸命見つけようとしているけれど、作者の名前なんか問題にならないんだから。

吉川 これからの日本人のころのことを考えると、直観的に、バリのようないろんなあり方が日本人の向かうべき方向なんじゃないかな、と思いました。

長尾 私もそう思います。人の名前を無理やり出して、この人はすばらしいという世界より、もう1つ上の世界ではないかという気がします。結果がよければいいのであって、

誰がということは問題ではない。ヨーロッパは個が中心といわれるけれど、中世の修道院あたりは個人なんて全然関係がなかった。

吉川 個を中心に考えるというのがむしろ、新しいんですね。自己のアイデンティティとか個の確立といったものが、いいことだし目指すべきものというふうな暗黙の価値観の中で私自身も生きてきましたが、バリに行って、そうした価値観とは違う原理で動く社会の様子を見たりする中で、これまでのものの見方や考え方がずいぶん変わりました。

長尾 日本の戦後教育が、あまりにもそういうことばかり言って、集団や社会を二の次、三の次にしてきたから。

吉川 もう一度、価値観自体を考え直すというか。その方が楽しいし、元気がでるように思います。大橋先生がおられるバリのウブドゥという村では、昔ながらの社会構造というか、人と人をつなぐ仕組みが保たれていて、その仕組みがすばらしい芸術を生み出してきたし、今もそれが続いています。大橋先生たちの研究グループところの未来研究センターとがいっしょに何かできることはないかと考えています。

●東洋的な価値観を発信する●

長尾 欧米の人たちに、そういう東洋的なものの考え方を認識させる努力を、われわれ日本人がしなければいけないと私は思っています。彼らの価値観だけでこれから世界全体がやっつけられるかと思ったら、絶対やっつけられない。東洋的なものの考え方の価値を科学的にきちっと押さえて、世界の心理学者に納得させるように頑張っていたいただきたい



ケチャ

大橋力先生の邸宅で開かれたケチャとガムラン演奏



ガムラン

ですね。

船橋 ものすごくむずかしい課題ですね。

吉川 私たちが意識せずに受け入れてきたいろんな価値を、もう一度見直さないといけないという感じがします。

長尾 いま、スタンフォード大学とかいろいろところで、仏教がものすごく流行しているというでしょう。なぜ仏教に関心を持つ人が増えているのか。スタンフォード大学の学生で調べてみると面白いと思うんです。若い人たちは、そういうものが持っている将来性に気づき始めているのかもしれない。

これから東洋的な価値観が西洋の価値観に取って代わるようなところへ行く必要があるということ、ころの未来研究センターが、欧米人にもわかりやすくロジカルな形で整理してPRしていったらいい。

吉川 はい。ころの未来研究センターのようなところはほかの国立大学を見渡してもあまりないので、研究の内容についても、組織についても、どういう方向で発展させていくのがいいのか、みなで議論しながら考えているところです。

ころのことを考えるには、表面だけでなく根元から、研究者の発想そのものが多面的になる必要があります。それには「つなぐ」仕組みの活用が大切だと思っています。まずは、京都大学の中にある他のセンターとうまく連携するところから始めて、他の大学との連携につなげる仕組みを作りたい。

長尾 新しい展開に期待しています。

吉川・船橋 本日はどうもありがとうございました。

(2009年1月10日、京都大学ころの未来研究センターにて)